

《朝鮮観・日本観》探求

—— 軌跡と展望 ——

研究班主任 三 谷 憲 正

1997年4月より1999年3月まで二ヶ年に亘って行われた人文科学関係の第二部門である（略称）「朝鮮観・日本観」研究班の活動等は以下のとおりである。

本研究班を統括するテーマは、【近代日朝の文学的著述における《朝鮮観》と《日本観》】であった。その中で、「本研究班の研究課題に基づき、各個人の創意と方法によって、日朝相互の文学的著述を掘り起こし、両地域における《朝鮮観》《日本観》の特徴に迫る。」ことを大きな目的として出発したのだった。

振り返って考えてみると、この研究の特徴は、テーマが非常に限定されている点だと思われる。すなわち、「日本」と「朝鮮（大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国）」という二地域間の狭い範囲での相互の「見方」を問題とし、さらに時代的にはここ百年前後の「近代」という時間幅の中で、問題が追求されるからである。

「朝鮮」と「日本」の関わりには二つの大きな節目がある。その節目が「朝鮮観」「日本観」を決定付けていると思われる。その一つは、1910（明43）年の韓国併合とその前後の時期であり、もう一つは1945（昭20）年、日本の敗戦による植民地解放（光復）とその前後の変化である。

班員が「朝鮮観」「日本観」を追求していくと、上述の問題にぶつかることになる。このような観点において、構成メンバーのそれぞれが各自の立脚する分野での知見を基に、朝鮮（韓国）から日本を、そして日本から朝鮮（韓国）を見る視線を共有して、討議して行くことを目指したのだった。

そのために、研究班を、《朝鮮観》《日本観》《朝鮮観・日本観》の3グループに分け、それぞれの視線を交差させて行きたいと考えた。その中で双方記録された著述（言説）を基に、〈文化〉〈人間関係〉〈思惟様式〉〈生活様式〉などの箇所に着目し、研究を進めた。

研究班スタッフとその研究題目は以下のとおりであった（なお、嘱託研究員、研究協力者等の位置付け、及び職階等、さらに題目に関しては第一年目のものである）。

【朝鮮観】グループ（主として日本側の著述を基礎にして、日本からの朝鮮観を探る）

三谷 憲正 兼担研究員・本学国文学科助教授

柳宗悦における朝鮮観

青山 忠正 嘱託研究員・本学総合研究所助教授

「征韓」論と朝鮮観

田山 令史 嘱託研究員・本学仏教学科教授

西田哲学の「一」について

船木満洲夫 嘱託研究員・本学英文学科教授

近代日本文学における朝鮮観

【日本観】グループ（主として韓国側の著述を基礎にして、韓国・朝鮮からの日本観を探る）

金 成俸 嘱託研究員・韓国済州大助教授

韓国新小説に描かれた日本人像

田 星姫 嘱託研究員・本学非常勤講師

朝鮮人の日本認識

許 聖一 嘱託研究員・本学非常勤講師

兪吉濬の日本観・西洋観

朴 貴仙 研究協力者・大阪大学大学院生

植民地体制下における韓国女流詩人の日本観

申 昌浩 研究協力者・国際日本文化研究センター総合大学院大学院生

日本帝国主義の植民地時代から解放後まで生きた人々の日本観

【日本観・朝鮮観】グループ（日韓の著述を基礎にして、日本観・朝鮮観を探る）

申 礼淑 嘱託研究員・本学非常勤講師

在日韓国・朝鮮人作家における日本観・朝鮮観

政岡 伸洋 研究協力者・本学非常勤講師

民俗学的著述における日本観・朝鮮観

トレイシー・ガノン 研究協力者・立命館大学大学院生

在日韓国・朝鮮作家における日本観・朝鮮観

第一回目の研究会は今年5月10日（土）に行われ、二本の研究発表があった。

- ・三谷^{ミタニ} 憲正^{ノリマサ} …… 近代日本における《朝鮮観》—— 博文館『太陽』を視座として——

- ・許^{ホウ} 聖一^{ソンイル} …… 兪吉濬の日本観・西洋観

前者の発表の趣旨は、博文館の『太陽』を基本文献とし、そこから明治28年（創刊）～明治40年までの朝鮮関係記事を抜き出し、それを分析の対象として、明治後半期の〈朝鮮観〉を描き出すことにあった。その中で、「諸悪の根元日本帝国主義」というスローガンだけでは、日本の近代は読み解けないのではないか、という問題を提起した。

また後者許聖一氏の発表は、初期の日本留学生である兪吉濬^{ユギルジュン}の『西遊見聞』を取り上げ、その日本観を問うものであった。なお、許聖一氏はこの『西遊見聞』の日本語訳を手がけていて、その成果が期待された。

第二回目は、7月26日（土）に行われる予定であったが、この日強い台風が近畿を襲い、構内から退去の指示があり、結局、順延となった。今となっては思い出の一コマではあるが、当日は張り紙による連絡やFAXを流すやらで大変だった。したがって、第二回目は9月27日（土）に持った。発表は以下のとおりである。

- ・田^{チョン} 星姫^{ソンヒ} …… 第一次修信使がみた明治日本—— 金綺秀の日本認識を中心に——

- ・申^{シン} 礼淑^{イエスグ} …… 在日韓国人（朝鮮人）作家の日本認識—— 登場人物の日本社会でのあり方をめぐって——

田星姫氏の発表は、近代明治の日本を、当時の朝鮮の代表的な知識人であり、かつ政治的な指導者の一人でもあった金綺秀が第一次修信使として来日した際の記録『日東記游』を基にして、当時の日本をどのように見ていたのか、を報告するものであった。

また、申礼淑氏の発表は、植民地時代から現代に至るまで、在日の韓国・朝鮮人がそれぞれの作品の中において、どのような姿勢を取り、どのように自らの位置を考えていたのか、を明らかにしようとした発表であった。

このところまでの研究会に関しては始発駅を発車し、一駅二駅通過したばかりのようだった。しかし、一つひとつの発表で熱気を感じたのは、内容が濃く、「研究」に値する「発表」だからだったように思われる。

なお、一步後で本研究班に加わって戴いたのが、本学非常勤講師の政岡伸洋氏（二

年目嘱託研究員)と、立命館大学の大学院に留学しているトレイシー・ガノン氏のお二人だった。政岡氏は近年二年間韓国の済州大学校に勤務されていた。また、ガノン氏はイギリスから来られ、在日朝鮮・韓国人文文学に関心を持たれている。その他、お世話いただく方として、本学文学研究科修士課程1回生で日本史専攻の本間千景さんにお出で願ったのも懐かしい。

いずれにしても、この研究会が発足し、日はまだ浅いが、しかしその後徐々にその「輪」が広がっている印象を強く受けたのを思い出す。

会終了後、研究会の“熱”を冷ますためではなかろうが、懇親会を開いて研究会の続きを持った。十人余りの研究班のおかげで、ほどよいコミュニケーションが取れ、「夜の研究会」の方も活発だった。

第三回目の研究会は97年11月29日(土)、いつものとおり、午後2時から開かれた。場所も変わらずに9号館(旧図書館)3階の総研分室であった。

発表題目：青山^{アオヤマ} 忠正^{タダマサ} …… 木戸孝允と「征韓論」
 金^{キム} 成俸^{スンボン} …… 韓国新小説に描かれた日本人像

前者青山氏(本学総合研究所)の発表は、「征韓」というタームを辿って行くと、明治初年に叫ばれた「征韓」と、その後現実的となっていく韓国侵略の際の「征韓」とは、言説^{ディスコース}のレベルでは同じものが使われているが、しかし、その内実は全く異なっているのではないか、というものであった。これは大変貴重な研究であり、ともすると従来の通俗的な解釈で事足れりとする見方に対して、学問的光りを当てようとしている営為であり、本研究会が何を目指しているかをよく示している発表だった。

後者の金成俸氏(済州大学校人文大学日語日文学科)の発表は、李人植^{イ・インチク}の『血の涙』に登場する「日本」および「日本人」の像を追求する、重厚な資料を用意しての発表であった。この作品は韓国の開化期の文学であり、作者の個人名が冠せられた最初の作品として著名なものである。分析した結果として、この小説は日本の軍人を美化し日韓併合を手助けするのに一役買った作品ではなかったか、という論旨であった。

第四回目の研究会は年が明けて98年1月31日(土)に、総研分室で行われた。

発表題目：金^{キム} 克美^{クンミ} …… 在日文学と民族意識の形成——李恢成と李良枝——
 田山^{タヤマ} 令史^{レイシ} …… 西田幾多郎の「一」

最初の金克美氏(京都精華大学人文学部研究科大学院)の発表は、在日韓国・朝鮮人作家である李恢成の「百年の旅人」や李良枝の「ナビ・タリョン」「刻」「由熙」な

どを対象として取り上げ、日本における韓国・朝鮮人が〈民族〉を自分たちの拠り所とした点に注目したものであった。

また、後者、田山令史氏（本学文学部仏教学科）の発表は、「亜細亜は一つ」といった観念にまで関わってくる、西田幾多郎の「一」観をめぐる、「絶対矛盾的自己同一」（岩波文庫 西田幾多郎論集Ⅲ『自覚について』所収）という論文に至る道行きを明らかにしようとしたものであった。すなわち「一」というものの持つ多義性が抽象化され、八紘一字の大東亜共栄圏へと収斂していく思想的プロセスを解明しようとするものであり、これもまた大事な研究だった。

第五回目の研究会は98年2月23日（月）～2月25日（水）の二泊三日で行われた。現地研修を兼ねて韓国ソウルにおいてである。会場はソウル市庁前のプラザホテルだった。以下その報告を点描する。

2/23（月）

ソウル金浦空港に無事着陸し、現地旅行社のバスで会場のホテルに向かう。予約してあった会議室を借り、研究会を開く。

発表題目：^{フナキ}船木^{マサオ}満洲夫 …… 日本文学における朝鮮観

^{マサオ}政岡^{ノブヒロ} 伸洋 …… 韓国済州島の村祭り ― 比較民俗的視点から ―

船木氏（本学文学部英文学科）の発表は、日本の古代（『古事記』『万葉集』）から近代にいたるまでの通時的な視点から、日本文学に登場する《朝鮮像》を検証するという大局的な視点からの発表であった。その中で特に中野重治の詩に着目し、そこに歌われている朝鮮人像にスポットを当てたものであった。

また引き続き、政岡氏（本学非常勤講師）は、比較民俗学的視点から、従来日本本土と韓半島との共通性が強調されるきらいがあったが、むしろ沖縄などとの関連を済州島の村祭りに見ようという試みであった。後半はスライドを使い、理解を深めるものであった。

その後、会場を^{インサドン}仁寺洞に移し、懇親会を行う。「懇親会」とはいえ実質的には、研究会で積み残した質問・疑問を討論し合う時間となるのがこうした研究会の常である。有益なひと時だった。

2/24（火）

9時、ホテルロビーに集合。そのまま、タクシーでソウル郊外の^{カチョン}果川にある「国史編纂委員会」へ向かう。道がすいていて、三十分ほどで到着。先ず受付を通し、李元淳委員長に挨拶する。気さくな方で広い委員長室にわれわれ一行を招じ入れ、この委

員会はナショナリズムの歴史観とは別の次元で運営されている、といった説明を詳しくされた。その後建物内部を見学し、閲覧室で資料を見せてもらう。昼食はこの委員会の職員用の食堂で食べる。韓国のお昼の風景がそこにあった。

午後はそこから「安重根義士記念館」へ赴く。伊藤博文を射殺した、〈韓国における救国の義士〉のイメージが日本での受け取り方とかなり違う点が改めて感じられた。

2/25 (水)

帰国の日。金大中大統領就任式にぶつかり、リムジンバスは不定期となり、結局地下鉄で金浦空港へ行く。その後無事関空に着く。

さてこの「朝鮮観・日本観」研究班もいよいよ、二年目に入ることになった。第六回目は98年5月30日(土)、いつもの総研分室(9号館3階)で行われた。

発表題目：^{ハラ}原田 ^{タマキ}環 …… 朝鮮のナショナリズムと日本観——最近のアンケートをもとにして——

原田環氏は広島女子大学の国際文化学部国際文化学科に勤務され、朝鮮近現代史・東アジア国際関係論がご専門である。今回の発表は、1991年の5月～8月にかけて日韓双方の都市で行った「日韓相互理解アンケート」の集計結果をもとに行われた。中でも特に興味深かったのは、「問19 韓国(日本)の正式名称」と「問20 韓国(日本)の政治体制」を答えるものであった。韓国から見た日本の正式名称で一番多かったのは「大日本帝国」(中学一年生では59.37%)であり、また同様に韓国人の考えている日本の政治体制は「国王専制」(高校一年生では41.72%)だった。様々な事どもを教えられた、刺激的な発表であった。なお、お世話係の本間さんが一年間の短期留学生として、韓国に行かれたので、二年目からは同じく本学大学院文学研究科の大野啓さんに替わってお願いすることになった。

第七回の研究会は、7月11日(土)に開かれた(場所は同前)。

発表題目：^{ミタニ}三谷 ^{ノリマサ}憲正 …… 日本近代の《朝鮮観》——「日鮮同祖論」を視座として——

^{シマムラ}島村 ^{タカノリ}恭則 …… 韓国の現代民話——日韓の比較の視点から——

前者の発表は、「日鮮同祖論」は外の包装紙だけが忌避され、中身(根拠)の方はそのまま使われているのではないか、という問題を提起したものであった。「言語論」に関しては、現在もなお、朝鮮語から日本語への影響関係はあると考えられている

し、古代朝鮮人の一団体が日本の皇室を形成したという考えも厳然とある。基本的に「日鮮同祖論」で使われている「根拠」は変わっていない。つまり形を変えた「日鮮同祖論」は現代でも流通している、という内容の発表であった。

後者、島村恭則氏（国立歴史民俗博物館民俗研究部）の発表は、韓国の現代社会で語られている種々の口承の物語を「現代民話」と定義付け、それを5種に分類し、分析と考察を加えたものであった。日本の場合と対比させると、韓国社会における「社会風刺」を織込んだ「笑話」は、顕著な特徴としてあげられる。研究班の知識の枠を広げてくれた発表だった。

第八回は、9月19日（土）に同様の場所で開催された。

発表題目：許^{ホウ} 聖一^{ソンイル} …… 朝鮮報聘使についての考察——初めての朝鮮派米使節団の一考察——

当時の朝鮮は、清国との朝貢関係という制約の中で「朝米修好条約」を締結し、まもなく、閔泳翊を団長とする11名の報聘使（外交使節）を米国に派遣する。今回の発表は、これまであまり注目されていなかったこの一行の足跡を後づけ、この使節団が持っていた意味を検討するものであった。とりわけ、当時米国で撮影された写真と「NEWS PAPER」（SEPTEMBER 29, 1883 付）掲載の拝謁している絵が関心を呼んだ。ここに写っている人物の服装や髪型、あるいは人員構成などが問題となり、興味の引かれる発表であった。

第九回は、11月7日（土）、総研分室にて。

発表題目：田^{チョン} 星姫^{ソンヒ} …… 『断髪令』について」

が報告された。ここでは、李氏朝鮮末期の、「断髪」令にいたる経緯や「断髪」の実施と人々の反発について考察が、研究史の流れを踏まえた上で、提示された。

第一〇回目は、「公開研究会」であった。角田房子^{ツノダフサコ}氏の講演と、引き続き金恩淑^{キムウンソク}氏（韓国教員大学教授）との対談が12月19日（土）に佛教大学四条センターで行われた。

この公開研究会の編成としては、第一部で、近代史を見つめるノンフィクション作家である角田房子氏に前半で講演をして戴いた。当方の趣旨の一つは、『閔妃暗殺』や『わが祖国』等で示された氏の隣国への深い眼差と温かい胸中をこの機会に聞くことができれば、というものであった。そして二つ目には、日本と韓国（朝鮮）は両者ともある種の親近感を持ちながらも、しかし、なぜうまく付き合っていけないのか。

どこにその問題があるのか。また、来るべき二十一世紀にはどうあるべきなのか。そのような問いに対して、氏のこれまでの仕事と今回の話が解決の糸口となれば、というものであった。この目論見に対して角田氏のお話は、当初予想していた以上の成果を収めることができたように思われる。

その後十五分程の休憩をはさみ、第二部として、角田氏と金恩淑氏のお二人に一時程度程度の対談をしていただいた。金恩淑氏は、角田氏が『閔妃暗殺』等を執筆する際に資料収集や取材に関して大きな役割を担った日本古代史専攻（文博）の研究者である。ここでは、角田氏が第一部で話された内容に、金恩淑氏の方から、質問を二、三するような切り口をもって、そのお話を耕しより深めていただけたのではないかと思われる。角田氏の資料収集の手伝いや、また韓国の取材にも同行されていた金恩淑氏の視点から質問をしてもらうことによって、より核心に触れる話を聞くことができた。

続いて、第一一回の研究会は年明けの1月23日（土）、同じく総研分室において、開かれた。

発表題目：青山 ^{アオヤマ} 忠正 ^{タダマサ} …… 「征韓」—— 言語と認識 ——

田山 ^{タヤマ} 令史 ^{レイシ} …… 西田幾多郎の「一」——「皇国」との接点を求めて

青山氏の発表は「征韓」という語をめぐり、用語は同じでも意味が変容しているのではないか、という問題提起を行い、「征韓」の19世紀における意味内容を探ったものであった。

また、田山氏の発表は西田の初期作品「善の研究」を取り上げ、その基礎概念である「純粹経験」「統一」を批判的に検討し、「皇国」と西田哲学との接点を追求した発表であった。

本研究会最後の締めくくりとして、1999（平11）年2月21日～23日にかけて、韓国済州市に於いて研究発表会並びに実地研修を行った。研究会の場所は「済州ロベロホテル」だった。

発表題目：申 ^{シン} 礼淑 ^{イェスグ} …… 李恢成にとって〈国籍〉とは何か

政岡 ^{マサオカ} 伸洋 ^{ノブヒロ} …… 比較民俗学の研究視角 —— その問題点と今後の課題

前者申礼淑氏の発表は、サハリンに生れ、日本で育ち、長らく朝鮮籍を有しつつも、近年韓国籍を取得した李恢成という作家において、〈祖国〉や〈国籍〉の意味を問うものであった。また、政岡氏の発表は、これまでの「比較民俗学」のあり方に疑問を

提示し、今後の方向性を打ち出そうとする発表であった。

ところで、この済州島での研究会に際しては、政岡氏の済州大学校での教え子たちも参加し、にぎやかな集まりになった。また、翌日の研修は、時間の都合で西半分ほどしか回ることができなかったが、その日の珍しいほどの冬の晴天のように、バスの中でもまた見学場所でも、終始和やかな雰囲気にもまれていた。このような済州島での研修が各自の胸奥に秘められた成果としてもたらされた（特に「四・三事件」等に関して）だけでなく、また一方では楽しい思い出にもなったのは、研究班班員の、金成俸済州大学校教授のご尽力の賜物であった。

付 記

この二年間、研究会の開催・運営に関しても、さまざまな面から主任の私を支えてくれた班員の方々、本当にご協力に感謝申し上げます。皆様の今後益々のご活躍を祈念しまして、結びの言葉とさせていただきます。